

第 4 章 関連団体と地域活動

第1節 関連団体

関連教育病院

—21世紀の医療に期待されること—

富山県立中央病院長 館野 政也

20世紀の後半の科学技術の発達には目覚ましいものがあった。軍事目的に利用されていた核が平和的に利用されるようになり、コンピューターの普及によるパソコンやFAX通信インターネットによる情報過多の到来、さらに医療の領域では、遺伝子操作、遺伝子治療などが行えるようになった。これらは、人間の生活にとってむしろハードコミュニケーションの進歩であった。しかしこの間に、人間の内的な部分を置きざりにしてはいなかっただろうか。たとえば、医師と患者が直接対面せず、ブラウン管を通して在宅で診療し、種々のオーダーのみで機械的に医療が実施されるとなると、医師と患者は肌で感じ合うコミュニケーションができなくなる。これでは、医療において最も大切なインフォームドコンセントどころか、患者の心を見つめ、心の通い合う優しい信頼関係の上に成り立つ医療ができなくなる。

20世紀の科学の進歩は人類に大きな恩恵をもたらした反面、科学ばかりに頼りすぎると、上述のような医師と患者との人間関係、ソフトコミュニケーションが稀薄化してしまう。21世紀は、医療の原点を求め、医療者と患者との触れ合いを大切にする、より良い人間関係の構築がさらに望まれる時代になって欲しいものである。21世紀の医療に求められるものは、20世紀の科学の発展に支えられつつ、医師と患者との人間関係をより良くすることに努める、まさにソフトコミュニケーションを築くことであろうし、そうなって欲しいと願うものである。

しらゆり会

「しらゆり会」は北陸地方における献体登録者の団体である。献体とは「本人の意志により死後その遺体を研究用に無償で提供すること（広辞苑）」である。自らの遺体を提供することにより、医学教育に役立ち、間接的ながら医学・医療の発展に係わって人類の未来に貢献しようとするものである。

日本における献体および献体運動の変遷については富山医科薬科大学『開学十周年記念誌』に中井精一氏が詳しく記されている。ここでは、その概要を述べるにとどめる。明治2年（1869年）8月、34歳で死亡したミキ女が遺言により献体し、医学校（後の東京大学医学部）で遺体解剖が行われた。これが、日本における献体第1号と言われている。戦後間もなく倉屋利助氏および同氏の紹介3名の「死体寄付の申し込み」を藤田恒太郎東京大学解剖学教授が受け入れられた。長男倉屋利一氏は父の悲願を受け継ぎ、献体を希望する人々の団体「白菊会」を藤田恒太郎教授を会長として発足させた。これが日本献体運動の始まりである。

倉屋利一氏と中井精一氏との出会いは、中井精一氏と山田致知金沢大学解剖学教授との出会いに発展した。この出会いが金沢大学に献体登録者の会「しらゆり会」の創立をもたらしたのである。石川、富山、福井の三県人を対象としていたが、富山医科薬科大学、福井医科大学の設立に伴い、それぞれの「しらゆり会支部」を創り活動している。

昭和46年3月には、献体登録者「団体」に「大学」を加えた全国組織「篤志解剖全国連合会」が創られた。やがて、連合会を中心に、日本解剖学会、日本学術会議、献体推進議員連盟などの協力により進められた運動が「医学及び歯学教育のための献体に関する法律」の成立（昭和58年5月）として結実した。この立法化推進過程で献体者に対して文部大臣の感謝状が

贈呈されることとなった。ここにおいて初めて「献体」が市民権を得たと言える。

「しらゆり会」創設以来、総会は金沢で開催されていたが、平成5年から各支部持ち回りで担当することとなり、「第24回しらゆり会総会」（平成4年）は「しらゆり会福井医科大学支部」、第25回総会（平成5年）は「しらゆり会富山医科薬科大学支部」、第26回総会（平成6年）は「しらゆり会金沢大学支部」がそれぞれ担当して開催された。各支部とも十分発展し、会員数も増加し、独自に活動する基盤が整ったため、第28回総会（平成8年富山で開催予定）を最後に、各支部が完全に独立して活動することになっている。

「しらゆり会富山医科薬科大学支部」では、中井精一会長、佐々學支部長はじめ理事を中心に理事会、支部総会、地区懇談会、法要、富山医科薬科大学教職員・学生との懇談会など活発な活動が展開され、生存会員は1,000名を超えている（平成7年6月現在で1,039名）。また、ここ10年間（昭和60年4月から平成6年3月まで）に富山医科薬科大学に献体した会員数は430名に及んでいる。

「しらゆり会」の発足、篤志解剖全国連合会結成の提唱、献体に関する法律制定をはじめ日本献体運動の先頭に立たれた山田致知先生は、平成6年に他界された。「しらゆり会」創立の当初から、ともに献体運動に精力的に携わってこられた中井精一氏の追悼文をここに掲載し、山田致知先生のご冥福をお祈りするとともに、「しらゆり会」を一層発展させることを誓いたい。（大谷 修）

山田致知先生

中井 精一

山田致知（むねさと）先生

あなたは「しらゆり会」発足の当初から北陸地方を中心とする献体運動の先頭に立たれました。

この間、篤志解剖全国連合会結成の提唱者・指導者として、献体に関する法律制定の困難な道の先頭を歩かれましたが、あなたのすべての

努力の結果は「第25回しらゆり会総会」（富山、1993年）に結実し、あなたを知るすべての人の温かい祝福を受けられました。

1994年のあなたの訃報は、私らを深く悲しませ、あなたを直接知らない「しらゆり会」一般会員も涙しておりました。

日本献体運動の最高の指導者、「患者の人権尊重」の無言の提唱者、推進者。

私らは、先生を忘れない！

医学部後援会

医学部後援会長 松下 勝八

開学二十周年記念誌の発刊を心からお慶び申し上げます。

本後援会は平成2年7月に発足いたしました。設立の契機は、本学が平成3年度に行われる西日本医科学生総合体育大会の主管校となる、ということにありました。この大会は医学生にとっては大変有意義な会ということで、本学からも永年多数参加していました。参加各大学はそれぞれ分担金を支払って参加していますが、主管校ともなれば、分担金でカバーしきれない支出の負担があるということ、並びに本学は国立であるため課外活動に補助が無いこと等により、当時の片山医学部長が前例のある他大学の実情をご調査されて、本会のような組織が必要であるということになった次第であります。また、課外活動は体育系のみならず文化系のものもあり、かつ、大学祭・芸術祭等の行事もある、ということもあって、課外活動の助成・福利厚生業務の促進に寄与することを目的とする（会則第3条）会として発足いたしました。

本後援会の組織は、在学生の父兄又は保証人で所定の会費を入学時に納入した方を正会員としており、その中から理事を選び、理事の互選で会長等の役員を選出し、会の運営に当たっております。本学の所在地の関係で、理事は富山県内在住の者が1学年につき3名（医学科2・看護学科1）宛選任されております。

本会の運営は、学生及び大学当局からの要望を聴取して、予算を編成し、理事会及び総会の承認を経て実行（支出）することです。支出項目は（直近年度を基準として）、運営費15%・事業費77%・積立金8%となっております。事業費とは、(1)課外活動（大会参加・大会登録・発表会・演奏会等）30%、(2)大学祭7%、(3)献体活動6%、(4)図書購入6%、(5)運動会・講演会7%等であります。運営費とは、会報印刷費・郵便料・事務費・会議費等です。積立金は、将来の有事（例えば遭難）に備える為のもので、平成6年度末では約900万円の累積残高となっております。

このように本会は発足以来満5年を経過いたしました。漸く“後援”パターンが出来てきました。関連団体である同窓会とも連絡をとりながら、本学発展のお手伝いをしていくつもりです。

医学部同窓会

—民間活力—

医学部同窓会長 高田 良久

医学部同窓会は昭和51年（1976）、第1期生入学と同時に準備され、昭和57年（1982）その卒業を機に正式発足致しました。しかしながら、研修、研究の多忙に取り紛れ、ようやく会らしくなってきたのは平成4年（1992）頃からです。名簿・会報の発行、卒業記念品の贈呈や卒業祝賀会開催、また、図書の寄贈など、本学の備品あるいは行事への協力といった従来の事業に加え、以下のような企画事業を行ってまいりました。

1) 附属病院短歌俳句の会の運営協力 1993年より

創造の喜びを通じて、豊かな療養生活を送っていただくとの趣旨から日本語・日本事情助教授大星光史先生を選評者にお迎えして発足しました。

作品投稿用のポストの寄贈や、作品集「邂逅」の発行（現在のところ年1回同窓会報発行

時）を行っております。

2) 医学教育の評価と展望（調査） 1987年、1992年

よりよい医学教育の模索のため、正会員・特別会員を対象に現在の医学教育に対するアンケート調査を行い、第1回中部地区医学教育シンポジウム（1988.1.11名古屋）、医学教育振興財団助成研究成果発表会（1993.6.2東京）、本学医学会総会（1993.12.4富山）で発表いたしました。現在審議中の新カリキュラムに、本調査結果が参考資料とされております。

3) 本学卒業生の就業状況調査 1993年

本学卒業生の富山県内公的病院就業率は10%でしかないという衝撃的な結果となり、1994.2.3付け北日本新聞社会面に3段抜きの見出しで報道されました。その後、県議会でも問題にされるなど波紋を広げています。

そのほか、医薬大祭記念講演会講演録として「竹林に會す」を出版（1995年10月）、富山医科薬科大学研修ガイド（仮称）を出版予定、開学20周年記念シンポジウム「今、大学は何をなすべきか」（1995年10月14日、パネリスト：西澤潤一、福川伸次、木村俊光氏ら）を開催してきております。

こうした関連団体としての特色を生かした事業に取り組むことで、会員相互の親睦と母校の発展、医学の進歩に多少なりとも寄与することができれば幸いと考えております。

薬学部同窓会

—富山薬窓会からの一言—

富山薬窓会長 森 政雄

富山薬学専門学校並びに富山大学薬学部を継承し、富山医科薬科大学が創立されて20年、開学二十周年記念誌の発刊を心からお慶び申し上げます。

さて、富山医科薬科大学の発足に際しましては、医学及び薬学両分野の知識、情報の交換が活発に行われることが期待されたものと思われまします。医療の担い手としての医師・薬剤師を両

学共通の場で育て上げることによって、医学を志すもの、薬学を志すものが互いに理解を深め合い、必要な知識を共有し、医療についての倫理感を高め合う、そのことが「患者さんが医療の主人公」との意識を忘れない、より優れた医療の実現につながるものと信じます。薬剤師が臨床現場の実際を知らず、基礎的医学知識に乏しく、医学用語もよく知らない、これでは医師と薬剤師の協力体制は難しいと言わざるを得ません。現在わが国においては薬学教育のあり方が問われており、その内容、年限等が再検討されております。創薬研究の従事者養成に傾きがちな従来の薬学教育から、医療の担い手としての薬剤師養成を専門とする教育を分離し、これに力を入れるべきとの気運がようやく高まって参りました。薬剤師は調剤ロボットに墮することなく、医師のよき助言者、協力者としての自覚をもって誇り高くその務めを果たさねばなりません。富山医科薬科大学がこのような理想的な医療の担い手養成に先駆的役割を果たされることを願ってやみません。

また一方において、富山医科薬科大学が地域社会に対し開かれた施設として、様々な問題に揺れる薬業界のため助っ人としての役割も果たしていただきたく、富山薬窓会にその橋渡しのお手伝いができればと考えております。今、薬窓会の会員たちは、医薬分業、薬学再教育、薬事法改正に伴う多くの課題、あるいは医薬品開発の現実と将来等様々な問題に翻弄されつつ、それぞれの分野でがんばっております。富山医科薬科大学がこれら薬窓会会員のために、あるいは県下の医薬品業界のために、21世紀に向けての高度な医療推進のよきアドバイザーとして、知識や情報の提供にご協力いただきたいと願いつつ、本学のますますのご発展を心からお祈りいたします。

第2節 地域活動

公開講座

本学では、教育研究の成果を広く社会に開放し、地域社会の教育文化の向上に資するため、公開講座を実施してきている。昭和59年6月に公開講座委員会を設置し、以来、本委員会が公開講座の実施に関する企画立案及び連絡調整に当たっている。

最近の科学技術の急速な進歩、人口の高齢化、社会構造の情報化及び国際化等に伴い、生涯学習の必要性がますます高まっており、本学が行う生涯教育全般の中で、リカレント教育を含めた公開講座の長期的かつ体系的な実施計画を検討している。

公開講座の年度別担当講師及び講義題目一覧表

昭和60年度「薬と健康」 12.5時間 受講者76名

加須屋教授(医) 富山の成人病の現状
矢野 教授(医) 易しい成人病の話
森田 教授(薬) 薬用植物現地指導(大沢野町猿倉山周辺)
身近な薬草と健康管理について

大浦 教授(研) 和漢薬と代謝改善
寺澤 助教授(病) 頭痛と和漢薬

昭和61年度「薬と健康」 12時間 受講者54名

加須屋教授(医) 老人ボケについて
倉知 教授(医) 老人ボケについて
辻 教授(医) 老人のかかり易い病気 整形疾患
窪田 教授(医) 老人のかかり易い病気 眼科疾患
片山 教授(医) 老人のかかり易い病気 泌尿器疾患

吉崎 助教授(薬) (学内施設見学)

荻田 教授(研) 老人と薬 和漢薬

難波 教授(研) (学内施設見学)

中川 副薬剤部長(病) 老人と薬 現代薬

出来田看護部長(病) 老人の看護の実際
(学内施設見学)

施設見学(病院、薬用植物園、薬学資料館)

昭和62年度「薬と健康」 12時間 受講者43名

篠山 教授(医) 老人と心臓病

諸橋 教授(医) 老人と皮膚

高久 教授(医) 老人と脳卒中

古田 教授(医) 最近の歯科治療法 ーいつまでも、おいしく食べられるようにー

木村 教授(薬) 薬の作用

吉崎 助教授(薬) (学内施設見学)

難波 教授(研) 薬物資源をヒマラヤに訪ねて

(学内施設見学)

出来田看護部長(病) 老人の看護の実際
(学内施設見学)

施設見学(病院、薬用植物園、薬学資料館)

昭和63年度「薬と健康」 12時間 受講者36名

佐々木教授(医) 肝炎の予防と治療

水越 教授(医) 高齢者の難聴

飯田 助教授(医) 腎臓病の話

森田 教授(薬) 身近な薬草と2～3の漢方薬

小泉徹教授(薬) 薬のできるまで

堀越 教授(病) 薬に関する最近の話題

寺澤 助教授(病) 不定愁訴と漢方薬

出来田看護部長(病) 老人看護の実際

平成元年度「健やかに生きるために」 11.5時間
受講者52名

篠山 教授(医) 心臓発作を防ぐために

櫻川 教授(医) A I D S とは何か

吉崎 助教授(薬) 生活の中の薬草

小野寺助教授(薬) 健康と体力づくりの運動処方

難波 教授(研) 健やかに食べよう

寺澤 助教授(病) 若さを保つための和漢薬の知識

出来田看護部長(病) 臨床看護者の立場から

施設見学（薬用植物園、薬学資料館、病院薬剤部）

平成2年度「健やかに生きるために」 11.5時間
受講者63名

矢野 教授(医) 栄養と健康
加藤義助教授(医) 骨と加齢
布施 助教授(医) 高齢者と排尿障害
森田 教授(薬) 身近な薬草について
小橋 教授(薬) 日本人の寿命
荻田 教授(研) においとあじ
斎藤 講師(病) こころとからだの健康
施設見学（薬用植物園、薬学資料館、病院放射線部）

平成3年度「健やかに生きるために」 12時間
受講者63名

鏡森 教授(医) ライフスタイルと成人病予防
高久 教授(医) 脳卒中の予防と対策
田中 助教授(医) 消化管（食道・胃・腸）の出血
吉崎 助教授(薬) 薬草の恩恵
渡邊 教授(研) 動物実験からみた「老化と和漢薬」
羽田 助教授(病) CTおよびMRI検査について
西田 副看護部長(病) ささえあい生きる喜びを
施設見学（薬用植物園、薬学資料館、病院放射線部）

平成4年度「健やかに生きるために」 12時間
受講者90名

渡邊 教授(医) 肝臓と病気
倉知 教授(医) 脳と精神活動 一画像診断から—
窪田 教授(医) 眼の健康を守るために
新居 講師(医) 女性の後半生とホルモン
木村 教授(薬) 食べものとおくすり
森田 教授(薬) 身近な薬草の利用について
服部 教授(研) 東洋人の知恵
西田 副看護部長(病) 大学病院医療のインフォメーション

平成5年度「健やかに生きるために」 テーマ

がんとエイズ 12時間 受講者81名
櫻川 教授(医) 後天性免疫不全症候群（エイズ）
北川 教授(医) 増え続ける肺がん
鏡森 教授(医) がんの免疫と予防
神郡 教授(医) がんと精神看護
田澤 助教授(医) 大腸がんの予防はできるのか
清水 助教授(薬) がんと伝承薬物
服部 教授(研) エイズのクスリ開発最前線
龍村 助教授(病) がんの治療法について

平成6年度「健やかに生きるために」 テーマ

痛みとのつきあい 16.5時間 受講者80名
辻 教授(医) 痛みと仲良く生きるコツ
井上 教授(医) 胸の痛み—狭心症か？—
高間 教授(医) 痛みとケア
遠藤 助教授(医) 頭痛・めまいとのつきあい方
新居 講師(医) 心配な痛みと心配ない痛み—痛みの正体を知ってかしこく生きる方法—
木村 教授(薬) 痛みと薬
清水 助教授(薬) 痛みにかかわりのある天然薬物
倉石 教授(研) 痛みと鎮痛の基礎
龍村 助教授(病) 癌の痛みとその対策
坂本 助手(病) 急性腹症—外科医からみた腹痛—

平成7年度「健やかに生きるために」テーマ 腎

臓と病気 14時間10分 受講者69名
小泉 教授(医) 腎臓のはたらきと尿毒症
稲場 講師(医) 小児腎疾患の特徴
大角 講師(医) 糖尿病と腎臓
横澤 助教授(研) 腎疾患と和漢薬
高田 助教授(医) 内科的腎疾患の進行とその対策
宮原 助教授(薬) 腎臓と骨障害
老田 副看護婦長(病) 慢性腎疾患のセルフケアと尿失禁の対処について
酒本 講師(病) 腎結石症—その治療の革命

的变化について—

風間 講師(病) 腎臓に見られる泌尿器科的疾患

注) 職名及び所属は、講演を担当された時のものです。

リカレント教育

富山地域リカレント教育学習コース

近年の急速な技術革新、産業構造・就業構造の変化に伴う時代の要請から、職業人を含む様々な社会人に対する各種学習機会の開設が求められており、本学も文部省からの『リカレント教育推進事業』の委嘱による『富山地域リカレント教育推進協議会』に参加して、平成4年度から学習コースを開設した。平成6年度までの3回は、本学薬学部教官を中心とする『富山医科薬科大学リカレント教育運営委員会(委員長:薬学部長)』により、その事業を推進した。薬学関係業務従事者等を対象とした、初年度「薬学基礎」、第2年度「創薬科学」、第3年度「薬学における情報処理技術の実際」はいずれも参加定員を満たして以下の通り実施され、多大の成果を挙げて事業目的に貢献した。

第1回 平成4年度学習コース

- 学習コースの名称 薬学基礎
- 実施期間 平成4年9月4日～平成4年12月18日 毎週金曜日 16回 32時間
- 受講者 30人
- 講義題目・担当講師
 - 9月4日 現代薬学の特徴
薬学部長・教授 狐塚 寛
 - 9月11日 薬用植物と生薬
薬学部助教授 吉崎正雄
 - 9月18日 光学活性医薬品の入手法、分析法
薬学部教授 小泉 徹
 - 9月25日 微量分離分析法の二、三の試み
薬学部教授 谷村 忍徳
 - 10月2日 胃と腸
薬学部教授 竹口紀晃
 - 10月9日 薬としての生理活性物質
薬学部教授 中川秀夫

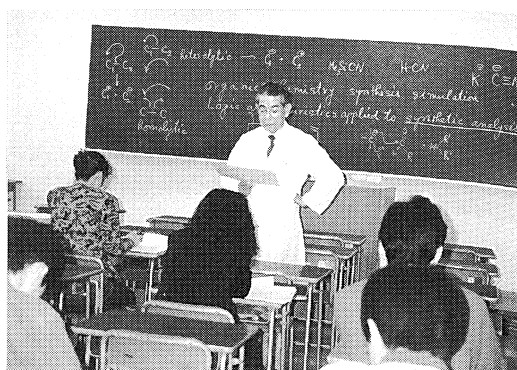
- 10月16日 骨代謝と薬
薬学部助教授 宮原龍郎
- 10月23日 腸内菌代謝
薬学部教授 小橋恭一
- 10月30日 抗生物質の作用
薬学部教授 西 荒介
- 11月6日 薬の効き方の遺伝学
和漢薬研究所教授 荻田善一
- 11月13日 薬のレセプター
薬学部教授 木村正康
- 11月20日 からだの中の薬の働き
薬学部教授 小泉 保
- 11月27日 脳に作用する薬
和漢薬研究所教授 渡邊裕司
- 12月4日 医療と界面活性剤
薬学部教授 上野雅晴
- 12月11日 市販製剤の評価
附属病院薬剤部長・教授 堀越 勇
- 12月18日 薬の歴史
和漢薬研究所教授 難波恒雄



第2回 平成5年度学習コース

- 学習コースの名称 創薬科学
- 実施期間 平成5年10月1日～平成5年11月26日 毎週金曜日 9回 30時間
- 受講者 30人
- 講義題目・担当講師
 - 1コース 「最近の分離分析、構造分析」
 - 10月1日 液体クロマトグラフィによる分離と分析
薬学部教授 谷村 忍徳

- 活性天然物質の分離と構造
薬学部助教授 清水岑夫
- 10月8日 構造分析の進歩—核磁気共鳴
和漢薬研究所教授 荻田善一
- 2 コース「最近の創薬合成」
活性ビタミンD
薬学部教授 吉井英一
- 10月15日 立体制御合成と創薬
薬学部教授 小泉 徹
有機合成計画法
薬学部教授 百瀬雄章
- 3 コース「バイオテクノロジーと薬学」
10月22日 消化管エコロジー
薬学部教授 小橋恭一
植物における遺伝子操作の利用
薬学部教授 西 荒介
- 10月29日 和漢薬とバイオテクノロジー
和漢薬研究所教授 服部征雄
- 4 コース「疾病と薬学」
炎症と抗炎症薬
薬学部教授 中川秀夫
- 11月5日 糖尿病態とインスリンの薬理
薬学部教授 木村正康
- 11月12日 消化器潰瘍と治療薬
薬学部教授 竹口紀晃
うつ病とその薬物療法
和漢薬研究所教授 渡邊裕司
- 11月19日 痛みと鎮痛薬
和漢薬研究所教授 倉石 泰
- 5 コース 市販製剤の評価（その2）
附属病院薬剤部長・教授 堀越 勇
- 11月26日 リポソームとDDS
薬学部教授 上野雅晴
薬動学・薬力学
薬学部教授 小泉 保



第3回 平成6年度学習コース

- 学習コースの名称 薬学における情報処理技術の実際
- 実施期間 平成6年9月1日～平成6年10月21日 毎週金曜日又は木曜日 10回 33時間20分
- 受講者 24人
- 講義題目・担当講師
- | | |
|--------|--------------------------------------|
| 9月1日 | 基本操作
実験実習機器センター助教授
五味知治 |
| 9月2日 | ワードプロセッサ
実験実習機器センター助教授
五味知治 |
| 9月9日 | 実験データの取り込み
薬学部助手 森 佳洋 |
| 9月16日 | 化学構造式の作成
薬学部助教授 高畑廣紀 |
| 9月22日 | ケミカルアブストラクトによる
文献検索
薬学部講師 武田 敬 |
| 9月30日 | 分子モデル
薬学部講師 武田 敬 |
| 10月7日 | 遺伝子解析
富山大学助教授 磯部正治 |
| 10月14日 | 統計、検定
薬学部助教授 木村郁子 |
| 10月20日 | 図、表作成
薬学部助手 篠田裕之 |
| 10月21日 | 画像処理・まとめ
薬学部講師 森井孫俊 |